

天皇・戦争・国民

——戦時下・短歌にみる十五年戦争の位相——

安 永 武 人

昭和の天皇は、一九二八（昭和三）年の即位にあたって、

後藤多喜蔵

御即位の勅語をたまふ御声の強くさやけく響きわたるも

（新万葉集・卷三二）

土屋文明

千よろづのことはありとも新しき御代のよろこびは朗らかにたつ

（昭和万葉集・卷二）

などと、祝福されたものの、その治世は、けっして平坦なものではなかつた。むしろ、これらの寿歌とはうらはらに、昭和の天皇は、不幸な時代の幕あけといわねばならないほどの、いまわしい事態の統発によって登場したのである。即位の前年には金融恐慌のきざしがあらわれ、中国山東への出兵もあり、即位の年には、三・一五の共産党員大検挙、済南事変、張作霖爆殺事件などがあいついでおこ

っている。一九三一（昭和六）年の、いわゆる十五年戦争勃発までも山本宣治の暗殺、ロンドン海軍軍縮条約の調印が統帥権干犯として政治問題化し、いつぼう陸軍部内には国家改造をめざす桜会が結成されるなど、不穏な事態がつづいていた。そのうえ東北農村の凶作は、

斎藤 徹

みちのくの岩手の民はうつせみの命つなぐと黒稗食ふも

（新万葉集・卷四）

野村鳴淑

娘をうりて足らず草の根木皮すら食むとふ国の年の寒さを

（同前・卷六）

などという歌がうまれるほど激甚なものであった。この農村の疲弊は後述する一九三六（昭和一一）年の二・二六事件の遠因となるも

のであった。

そして一九三二（昭和六）年九月、関東軍の謀略による柳条溝の鉄道爆破が、十五年戦争の発端となったのである。

1

山田薫里

号外の鈴をさき吾は飛び出でぬ満州の戦のさまを知らんと

横山梅流

寒気厳しきチチハル市には我軍の精鋭みちのくの兵ぞ戦ふ

木下国一

満州事変にこころたかぶりし世のさまや支那人に紛せし役者なぐらる

（昭和万葉集・巻二）

満州（中国東北部）にあがった戦火は、翌年一月には上海にもとび火した。上海には日本人居留民がいたので、この戦乱にまきこまれた人たちもいた。

山本初枝

排日を恐れて日毎家にこもる幼子は日本へ帰りたいといふ
弾の落つる音しきりなり外出せし夫の帰りをひたすらにまつ

杉本勇乘

塹壕に^{ざんがう}いまだ^{じゅうい}戎衣の血に染みて散らばりあるをまさめに見たり

（同前）

しかし、内地では現地ほどの切迫感はなかった。

樋口地笑

新聞を途に受取り馬籠の上に上海事件の記事読みつつぞ行く

広野三郎

上海出征の召集兵を宿す

多くを言はぬこの中年兵は上海の戦闘記事をむさぼり読めり

（新万葉集・巻七）

「中年兵」そのひとつには緊張がうかがえるが、それを詠む作者には同情しかなかったのだろう。かつて日清戦争に勝利し、中国に優越感をもっていた日本の民衆には、こんどの中国との戦争についても、日本が敗北するかもしれぬという危惧をもつものはほとんどいなかっただといつてよい。ましてこの戦争の本質が帝国主義的侵略であると認識していたのは、ごくかぎられた少数の識者のみであったろう。だから、

音尾秀夫

いざ射てと言ひはなつ匪が頸のべて底まむ眼の光したたかに
匪の首領の首うつむけにころがりて夕陽の村はただにしづけし

（新万葉集・補巻）

というような優越者の立場からの歌もうたいえたのだ。しかし、身
辺知己の死はふかく悼まれている。

齋藤善司

上海に召されゆきしは知らざりき今日学校に出でて君が死を聞く

松井一郎

上海に戦はなほつづきぬ九州の兵も多く死にたる

(昭和万葉集・巻二)

岡田 真

むらがるる民国兵の只中へ燃えながら吾が爆撃機墜つ

(新万葉集・巻九)

戦死者については、太平洋戦争にはいっては防謀上の必要といふこ
とで極力秘匿されたのに比して、この時期はむしろ名譽の戦死の顕
彰という意味あいがあつて、新聞・ラジオで報道されていたから、
郷土部隊関係はとくに人びとの関心をひいた。それはかりでなく、
防謀上の配慮を必要としないほど、当時の軍部は中国の戦力を過小
評価していたことをものがたつてゐる。この上海戦をつうじて国民
の戦意高揚のために最大限に利用されたのは、いわゆる「肉弾（爆
弾）三勇士」の戦死であつたといわねばならない。苦戦をしいられ
ていた日本軍は、廟行鎮の戦鬪で、中国軍がはりめぐらしている鉄
条網を破壊するために江下武二・北川丞・作江伊之助の三人の工兵

が、破壊筒とともにとびこんで爆死した事件である。陸軍は新聞社
と提携してこの三兵士を日本の典型的な勇士として喧伝した。ここ
にはのちの太平洋戦争末期にあらわれた、特攻作戦における生命と
ひきかえの攻撃方法を肯定する思想の萌芽がみられる。陸軍省に三
兵士の母親を招いて荒木貞夫陸相が、天皇の祭幣料を伝達する場
面の写真が、新聞におおきく掲載され、この「軍国の母」たちは国民
の讃仰をあびた。また東京芝青松寺には、爆死直前の突撃姿が銅像
としてたてられ、さらに東京日日新聞社が公募した「爆弾三勇士の
歌」に与謝野鉄幹の作詞が当選して、小・中学生を中心に全国的に
高唱された。

廟行鎮の敵の陣 われの友隊すでに攻む

折から凍る如月の 二十二日の午前五時

というのが、その冒頭の一節である。とうぜんこの三勇士の忠烈物
語は、のちの国民学校（小学校）国語教材にもえらばれ、「少国民」
たちのやわらかい頭脳に、「軍国美談」として刻みつけられた。

谷口武彦

おのれすて皇国を護る和魂の凝りて散りたれひとをたしむ

(新万葉集・巻五)

西村光弘

上海のいくさまぬるしと思ふ時この死ざまは胸すきにけり

(同前・卷六)

森田馨造

爆薬筒脇に抱へて一瞬の後に果つべき身はためらはず

(同前・卷八)

北原白秋

ますらをは凄まじかりけり行きいたり火と爆ぜにけり還る思はず

齋藤 瀏

身を弾丸と炸きたる戦友を讃へつつ心の底に湧く矜あり

太田水穂

こなこなに空に飛びちりてあと形も亡くなり果てし命を涼しむ

(昭和万葉集・卷二)

このキャンペーンは、成功であったといわねばならない。一般人はもとより、専門歌人たちを軍国主義思潮のなかにまきこむことができたからである。また、一九三七（昭和一二）年の日中全面戦争に突入する前段階において、専門歌人たちを思想的に同調させることに成功したのは、歌壇における各結社の長として指導者意識のつよいこれら専門歌人たちが、その後、戦局の推移につれて、歌による軍国主義の鼓吹に、いっそう重要な役割をはたす基盤ができたことを意味するからである。それは大人の世界だけの現象ではなかった。

杜みどり

肉弾三勇士の映画見しならむ園児等はござをば巻きてそのまねをする

室伏寿美

塀越しに聞こえてくるは三勇士の今しも進む紙芝居の声

(同前)

などのように、幼児の世界にまで浸透していたことがわかる。このとき、その幼児がかりに五歳であったとすれば、九年後の太平洋戦争勃発を中学生としてむかえているわけだから、幼児期のこのような影響を軽視するわけにはいかないであろう。

このように中国大陸における戦火がようやく鎮静化し上海停戦協定が成立した直後に、国内では一九三二（昭和七）年五月一日クーデター未遂事件が少壮海軍将校を中心にひきおこされた。首相犬養毅が官邸で射殺された、世にいう五・一五事件である。この年はこれよりさき二月に前蔵相・井上準之助が、三月には三井合名理事長・団琢磨が、いずれも右翼の血盟団団員に射殺されるという、テロリズムのあれくるう殺伐とした季節が到来していた。またその前年の桜会の陸軍将校たちによる国家改造を目的とするクーデターが三月と十月に未発におわった事件なども、この五・一五事件の底流をなしたことは否めない。この犬養の死によって、事実上、政党政

治は終焉をつけることになる。軍部は総力戦体制を実現するために、軍部による政治の全支配を求めていたのである。軍部と民間右翼の連携もこの時期の特徴のひとつといえるだろう。

木下立安

七十八の総理大臣大養毅射つならうてと射たせたるかも

(新万葉集・巻三)

村田光烈

丈夫まうとの行くべき道をつひに行きて帰らぬ君となりにけるかも(大木堂先生を悼む)

(同前・巻八)

上 稲吉

政党の腐敗はあれど血をもつて償つぐなはしめむとする心おぞまし

齋藤茂吉

卑怯なるテロリズムは老人の首相の面部にピストルを打つ

中村清一

すめらぎの直屬の軍人の犯行まいたなり来るべき国家を思ひ寂しむ

(昭和万葉集・巻二)

ここには、暴力の行使に倒れた老宰相への愛惜と、その暴力にたいする憎しみがある。しかし、これらの犯人たちの軍法会議がはじまると、国民の感情は微妙に変化してくる。

宗 不旱

大君のわかき士官ら世を慨なげば事一途いちづなる思ひはしけむ

中島哀浪

真白き軍服の士官直立しかくすところなき陳述のすがすがしさや

佐々木幽峰

国法に触れてもあへてひるまざる若き士官を憎く思はめや

酒井 孝

私心なき純情青年の一語一語心にしみて肯うべなはるなり

(同前)

というように、反乱軍人たちにたいして、その動機の純粹性を肯定する同情的な評価がはじめてくる。この事件にたいする否定・肯定のそれぞれの歌であって、昭和日本の理性と狂気のはざまを証しうる歌というべきであろう。この純粋動機肯定の国民的同情と、軍法会議における「行為は罪重大だが、憂国の情を認む」という、フアシズム迎合の判決によって最高が十五年の禁錮であって、死刑が一人もなかったということが、後述するように、四年後のおおがかりな武力クーデター二・二六事件の直接的先蹤になったのである。そこには政党政治の否定による性急な国家改造への志向があり、その実現のためには実力行使も許容されるという傲慢で反近代の思想があった。目的のためには手段をえらばぬ、硬直した思考様式が

支配していたのだ。これは十五年戦争をつうじて軍部の体質と化していって、日本国民をついに敗戦の悲惨にまで道づれにしたのだが、国民のがわもまたその非道の体質にすくなからず汚染されていたのである。この事件の犯人たちに比較的同情的であった新聞の論調は、そのあらわれのひとつであったろう。ひとり福岡日日新聞の編集局長・菊竹淳が「敢て国民の覚悟を促す」という論説を、事件直後の十七日に書いて、軍部に痛烈な批判をあげせたくらいのものであった。つまり世論の右傾化・親軍化が時代の大勢となるまざしがみえはじめてきたのである。この事件は政党政治を抹殺し、「問答無用」の実力行使をとうぜんと考え、そのうえ軍部と民間右翼団体との提携を可能にする先例をひらいたのであった。

柳田比左士

愛郷塾頭断罪すべしさりながら世の勢ひをはばむべからず

(新万葉集・巻八)

大勢いかんともしがたし、というあきらめもまざっていたのだ。

翌一九三三(昭和八)年一月、まず大塚金之助・河上肇らが検挙され、二月になると、長野県でいわゆる「赤化教員」一三八名の大量検挙があり、その二十日にはついに小林多喜二の拷問による虐殺をみるにいたる。

松坂二郎

大塚金之助教授の捕はれし記事を読み冬霧こむる街に出で来つ

田中京之助

拡大する赤化教員検束は遂に及ぼす友の身上に

山田比呂の里

臥りゐてたかぶり読みぬ赤化教員の解禁記事は全紙にわたる

矢代東村

逮捕、急死、急死、急死、急死。ああ、それが何を意味するかはいふまでもない。

本間源治

骨となり一人の母に抱かれ帰り港の小樽は汝に寂しき

安倍俊子

小林多喜二を悼む文よめば削除されてきれぎれなるが腹立たしかり

(昭和万葉集・巻二)

前半三首は、天皇制権力が共産主義思想の浸透をおそれ治安維持法による兇暴な弾圧を、とくに教育界に集中した事例であり、ジャーナリズムの煽情的な記事によって、国民に恐怖心をあたえた。教育をとおしての児童・生徒・学生へのこの思想の定着をあらかじめ防止しようとする意図もあつたにちがいない。後半三首は有名な小

林多喜二虐殺事件にたいする憤りである。党組織・党員への壊滅的な打撃をあたえて、反共弾圧はほぼこの年で終結する。しかし、こゝとは共産主義・社会主義に関係すると判定された人びとのみでは終らなかつた。

この年の四月、いわゆる京大事件がおこつたからである。京大法学部教授・滝川幸辰の自由主義的な刑法解釈にもとづく『刑法読本』が共産主義的であるとされたのだ。政治的確信犯と一般犯罪とのちがいが、姦通罪の妻のみへの適用の不当性を指摘したのが、日本社会の良俗に反するとされたのである。この本が発禁処分をうけたにとどまらず、ときの文部大臣・鳩山一郎はこれを理由に滝川の休職を京大当局に要求した。法学部教授会は一致してこれにつよく反発したが、文相はついに滝川教授を文官分限令によつて休職処分にした。この不当な処置に抗議して法学部教授会は、佐々木惣一・末川博・恒藤恭らの諸教授が、いつせいに辞表を提出、法学部は解体した。しかしこの事件は、こと大学の問題であり、「学問の自由」という一般人には無縁の問題であつただけに知識人・学生の関心はあつめられ、世間一般の人たちに危機感をあたえるものではなかつた。

たたかひは支那にあれども朝々に滝川氏事件の記事をまつ読む

天皇・戦争・国民

岡本彦一

大学の教授らの決心かたきときくにむだごとなりと世人かへりみず

(昭和万葉集・巻二)

この二首は世人のこの事件にたいする関心のありようの二面をよく示しているといえよう。そのたたかひの当事者のひとり之歌、

佐々木惣一

学を護るつとめとわれにたゆみなく鞭むちちて来ぬ一すぢの道

(新万葉集・巻四)

は、「昭和八年七月京都帝国大学教授免官」のことは書きをもつだけに、たたかひにやぶれて、なお、いさぎよしとする自己満足があるとともに、やはり敗者の孤独な無力感はいなみがたい。大学という「象牙の塔」のなかだけのたたかひであり、「民衆からの孤立」をよぎなくされた当時の知識人の悲哀であつたといわねばなるまい。かくてこれは共産主義・社会主義の思想ばかりでなく、自由主義の思想も許容されない「冬の時代」の到来を象徴する事件であつたといふべきであつた。思想・言論・表現のすべての「自由」が圧殺され、軍国主義思想のみが濶歩する時代にのめりこんでゆくのである。それを根本において支えるのが、明治いらいの学校教育でつちかされてきた天皇絶対の思想であつたといつてさしつかえないであろう。

小島 清

石樽千亦

ひむがしの海を照らしてさしのぼる朝日の如きわが大君かも

(新万葉集・巻一)

菊池猶喜

いでましと君が代の楽地をゆるに総身は凝りて動きえぬかも

(同前・巻三)

杉江彦太郎

御車を今下り立たす大君の大御姿は神にしまします

(同前・巻四)

深川耕人

鳳輦みくるまに御手あげ給ふたまゆらをうつつの眼には涙こぼるる

(同前・巻七)

村山清益

もろ人のこそぞりてさけぶ萬歳にわが大君は御手あげ給ふ

(同前・巻八)

吉植庄亮

大君の百姓おほみんからに生まれ来てわれは白玉の米を培つちかふ

(同前・巻九)

今村沙人

うは言の中に皆に別れを告げて後天皇陛下萬歳を再唱したり

死に際に天子萬歳と申せりと妻より聞きて心おちらぬ

(同前・巻一)

いずれも天皇とのふかい精神的なつながりのなかに自己の存在を確認している歌であり、作者たちにとって天皇はいささかの疑問も批判もいなく余地のない完全無欠の絶対者・神として位置づけられている。このような天皇との一体感、明治いらいの天皇制教育の国民思想形成における成果であつて、この一体感こそ、皇統連綿・万邦無比の国体観の基礎にあるものであり、ひるがえせば、それは他民族への優越感となつて、侵略をなんのうしろめたさもなく、正当化することのできる論理の根源となつた民族としての自己認識であつたというべきであらう。

この年、日本は、三月に国際連盟からの脱退によつて、国際社会から孤立する道をえらび、その十月連盟から脱退したドイツと、やがて「枢軸国」という国民の共感しやすい名称による提携の端緒をひらいて、暗雲低迷の外交場裡にいつそう孤立化の道にふみこむことになる。

そのような対外政策を国民は冷静にみきわめることができないうま、この年の師走をむかえるのだが、その二十三日の皇太子誕生は時代情況への認識を理性的にふかめるかわりに、それを逆転させて天皇制強化の国民感情をもえあがらせる役割を、はからずも演ずる

にいたった。

可兒敏明
著おきて聴くにかしこし生れませる皇子は日嗣の皇子にぞまし
ます

(新万葉集・巻二)

小西彦磨

日つぎの皇子みあれましぬとこの朝旗をあげつつ涙ながしぬ

(同前・巻三)

佐佐木信綱

神の国に神の祐ありたか照らす日の大皇子は天降りいませり

(同前・巻四)

原 常雄

かしこしや日の大皇子はさし出づる光りの如く生ひたせ給ふ

(同前・巻六)

樋口虎若

ほぎまつる言葉も知らず嬉しさに涙流れてとどまらぬかも

(同前・巻七)

依田秋圃

強き国正しき国のみ民らに歎呼新たに湧き起りたる

(同前・巻九)

このように、皇太子の誕生は、歎呼の声をもって国民にむかえられた。それまで女性ばかり三人生まれていた天皇家に、直系の男子がうまれたことが、これほど国民によるこぼれたのは、日本の家族制度の原型である天皇家において、やっと男子の長子が相続することが可能になった、同型の家父長相続への安心感であったというべきであろう。皇太子誕生は花火、号砲、ラジオ、新聞の号外で大々的に宣伝され、さっそく提灯行列や旗行列がおこなわれたのであつた。

しかし、国民の、天皇やその一族への共感とはかけはなれて、治安維持法違反によつて獄中にあつた共産党幹部、佐野学・鍋山貞親ふたりの転向声明「共同被告同志に告ぐる書」が、獄中にあつた多数の共産主義者・社会主義者たちの転向をうながす端緒となつたという、日本の近代思想史上に空前の事態をひきおこしていた現実の進行をみがしてはならないだろう。天皇家、ひいてはファシズムの「弥栄」と、共産党の凋落とが、まさに反比例して進行した時期であつたといえるだろう。

高林明雄

佐野鍋山の思想転回を新聞紙しるく書きたり何の意ぞと思ふ

福田 寛

佐野学の公判記事を読みさして吾つかれをり夜汽車あつきに

内田穰吉

我が思想説くすべもなし父も母も悪魔の業と我に歎かふ

プチ・ブルの性は悲しも父母の繰言聞けば心はゆるむ

林田茂雄

多喜二の死佐野鍋山らの大量転向皇太子誕生でこの年も暮れる

(昭和万葉集・巻二)

こうして波瀾にみちた一九三三(昭和八)年が終った。

一九三四(昭和九)年三月、日本の傀儡政権・満州国が、皇軍溥儀をいたたく帝制を実施した。そして四月、全国小学校教員精神作興大会が開催され、天皇が臨席している。これはおそらく前年のいわゆる「赤化教員事件」を憂慮した政府の演出であつたのだろう。そしてこの巧妙な演出は成功した。

上坂信勝

畏さに涙たまりてあふぎたり我大君は挙手をたまへり

(新万葉集・巻二)

白鳥義千代

草莽の孤の臣と思ふだにかしこきかなや涙あふるる

(同前・巻四)

田辺弥太郎

親しくも勅語たまはる現つ神わがすめらぎを仰ぐ尊さ

竹村 明

人の子を教ふる道に力めよと論し給へりみこゑしたしく

(同前・巻五)

根岸清一

春雨の霧らふ玉座にあなかしこわが大君は立たせたまへる

(同前・巻六)

吉田緑泉

み立たしのが大君を仰ぎ見て涙せきあへずわれはうれしき
はたとせを子等と書読みけふの日のこれのめぐみにあひにけるか
も

(同前・巻九)

これらの歌は、天皇の姿にじかにまみえ、その声を聞くよろこびを、あらわに表現している。こういうじかに教師たちの心をつかむ機会を設定した文部官僚の頭のよさに感心するほかはないが、それは小学校教員のみにはとどまらなかった。

吉田緑泉

十六日桐生高等工業学校々庭児童奉拝

いでましのわが大君は幼きを玉階の上ゆみそなはせ給ふ

十七日高崎乗附練兵場青年男女御親聞

すめらぎのわが大君はあしびきの赤城の山をそがひに立たす

(新万葉集・巻九)

天皇の權威と威光は、小学校の児童・青年男女にまでおよんだのである。この時期、左翼の抬頭に治安維持法と特高警察の強権による弾圧をもって對抗した権力が、将来をおもんばかって、児童・青年男女を天皇の翼下に、親近感と畏敬感とによつて組織するため、きまこまかく演出していたことがわかるであろう。

陸軍特別大演習というのが、場所をかえて毎年秋に恒例として稲刈りがすんだ田圃を舞台にくりひろげられた。これを統監する天皇は、国民にとつてめつたに拜むことのできぬその姿をみる、機会を与えるという役割をはたしたのだ。

浅井善太郎

戦況をみそなはしつゝ錦旗いま進ませたまふはるか彼方を

声のかぎり旗をふりつつ行進歌うたふを聞けば涙ぐまるる

(新万葉集・巻一)

吉田緑泉

天皇の統ぶるみいくさわが見むと霜凍結る野に夜を起ちつくす
かちいくさに勇む兵等のしりへより群衆もすすむ田畑をふみて

(新万葉集・巻九)

演習のおこなわれる地方の住民にとつて、それは天皇の姿をみる

千載一遇の機会であった。だから、かれらは夜を徹してでも演習をみようとしたのだし、演習の展開にしたがつて、軍のうしろからつきしたがって動いたのである。このような演習に参加する兵士は、おおくのばあい民家に宿泊した。軍としてどのような意図があったのか、つまびらかではないが、おそらく軍事知識の普及とか、親軍感情の育成などを考えていたのではなからうか。

岩本宗二郎

子供等と毬投げあそぶ丸腰の兵士を見れば顔のをさなざ

(新万葉集・巻一)

徳田岸郎

機関銃撃ちてみせしより友となり長崎の児等が賀状よこしぬ

(同前・巻五)

橋本 滋

水兵の今宵来るを子供等のためしみ待ちて夕餉せぬかも

(同前・巻六)

などのように、子どもたちに兵士たちの民宿は、たいへん人気があった。敗戦までの男の子の遊びのひとつに、「戦争ごっこ」が定着し、うけつがれてきたのも、ゆえなしとしない。こうして子どもの頃から、戦争を忌むべきものとしてとらえる思想の育つ土壌は、ほとんどなかったといつてよいであろう。天皇の軍隊への信頼感はず

るぎなく育てられたけれども。

しかし、そうではあっても、そのうらには大人の本音があったのだ。
だ。

成田小五郎

弟が少年航空兵を望みしも呉服屋の丁稚ていぢに住みこませたり

(昭和万葉集・巻三)

曾山祐博

兵役にかかはりあらぬ吾が上をうれしとあらはに言ふかも妻は

岩津資雄

待つとあらね召集令状けふも来ず夕べしづかに雪ならむとす

玉尾延忠

もの思ひ思ひ残れどかにかくに我は召されて行かざるべからず

柳沢信繁

常々は戦争反対となへしが今朝応召に立ちゆきにけり

金田すみ子

上等兵になりて帰れと末の子の入営を祝ぐ父老いたまふ

(同前・巻二)

しだいに戦争の渦にまきこまれる庶民の本音が、どのようにしてつぶされていったか、その過程をたどることができる一群の歌である。日清・日露戦の勝利を記憶する老父は、戦争を兵士の進級と結

びつけてしか認識できないし、老年層と「戦争ごっこ」に熱中する幼少年層とが、戦争を積極的に支持する、そのはざまにたつて、徹底して戦争反対の立場をつらぬくこともできぬ、しかし本音としては、せめて自分だけは戦争にまきこまれたくないとおもう妻と子どもをまもらねばならぬ中年層とのちがいが、歴然とうかびあがってくる心情表現の歌の一群である。死を覚悟しなければできなかった兵役・召集の拒否は、戦後の学生たちが「きけわだつみのこえ」〔日本戦歿学生の手記〕をよんで「この愚かなる先輩たち」と嘲笑したような、なまやさしい問題ではなかったのだ。天皇の命令を「召されて」とか「応召」とかいわざるをえなかった本人あるいは周囲の人たちの、時代にしばられた心の苦渋・悲哀をものがしてはならないだろう。天皇・天皇制の残酷・非人間性はこちらにもあらわである。天皇のおかした罪は、国民ひとりひとりの人間として、このころのなかにまでふみこんで、それをおもうままにふみにじり、その過程で、国民の命までも奪ったところにある。そしてなお、いまのわたしたちが救われない、やりきれない思いをするのは、天皇が、そのことを、まったく自覚しないで、自分を免罪しているその無恥・厚顔さにあるのだ。

この年五月、ながいあいだ帝国海軍の象徴的存在であった東郷平八郎が死んだ。国葬をもって葬られたことはいうまでもない。

島田兵三
もののふの自分を守りて沈黙居れど徳望高し第一の臣

佐伯仁三郎

アナウンサー感極まりてマイクの前泣きいづるにしわが泣かざる
る

人老いてきよらなりける一代なりそのきよらかさ日本を泣かしむ

(新万葉集・巻四)

一九三五(昭和一〇)年は二月に美濃部達吉の天皇機関説が、貴
族院で糾弾の的となり、「謀反人」「字匪」という罵倒までで、反
国家主義・反天皇主義者として、議員の辞職を強要される事態まで
ひさおこした。

中村襄二

老博士を鞭打つものらの執拗さは常臥すわれの血を沸らしぬ

春田 操

学者にして自説を主張し得ざるかなしさも時世にあればすべな
るべし

(昭和万葉集・巻三)

美濃部は著書『憲法撮要』を発禁にされ、政府は再度にわたって
機関説否認の、いわゆる「国体明徴」声明をだし、ついに貴族院議

員を辞任させられるにいたった。これは、京大事件につづいて「学
問・研究の自由」が抹殺される事件であつて、これ以後、急速に言
論・思想の自由はせばめられてゆく。

この年は農村、とくに東北地方の農村の窮乏はいちじるしかった。

佐藤 杏

年々の負債となりて残るべき借入米ををがみて食ひき

赤根谷善治

餓もなき安き米売り幾年か窮乏のときに凶作は来ぬ

鈴木祐喜

凶作を嘆く村々に秋づきて眠り病といふが流行りぬ

古宇田清平

ほそぼそと短き茅の立つごとく出でて稔らず瘦せし稲の穂

結城哀草果

貧しさはきはまりつひに感ころの娘ごとく売られし村あり

佐藤彰矩

寒ざむと餓ゆる子ら見れば術なけむ血を売りて友の頬はこけたり

矢代東村

素晴らしい外套を着て 知事をつれて 大臣の 視察といふも
のは それでいいのか。

手島 徹

飢えきりし児らは乳房に傷つけて母死なせしときくは身寒し

(昭和万葉集・巻三)

この農村の惨状は、青年将校たちを国家改造の思想にかりたてた。日常したしく教育する壮丁たちに、こういう農村出身者がおおく、家族の窮状を憂慮して軍務に専念できない状況をみている青年将校たちには、国家改造がいいに、この窮乏の打開はありえないと確信されるにいたったのである。これが翌年の二・二六事件のひとつの原因であった。

この年は永田鉄山陸軍軍務局長が、白昼、陸軍省内で現役軍人に斬殺される事件があり、国際的にはイタリーがエチオピアへの侵略を開始するという、内外ともに殺伐とした空気がたちこめはじめた。

一九三六(昭和一一)年、二月二六日早朝、皇道派青年将校にひきいられた歩兵第一、第三、近衛歩兵第三の各連隊の一部約一四〇〇名の部隊が、首相官邸そのほかを襲撃、斎藤実内大臣、高橋是清蔵相、渡辺錠太郎陸軍教育總監を射殺、鈴木貫太郎侍従長は重傷、岡田啓介首相は従弟が誤認されて射殺され、難をまぬがれた。

大橋松平

叛乱部隊の歩哨立ちたる街行きて氷りし雪を暗に蹴散らす

神原克重

大み心おし測りまつるだにみ民わが心は痛しやすからぬかも

(新万葉集・巻二)

身一つを棄てて起ちたる兵士らぞ事件すぎて後何をか言はむ
古賀照房

幸にして未だ銃火を交へずと三度ラヂオのいふに頷く
野老 檀

(同前・巻三)

真実に国思ふ人は一向に荒ぶる人に射たれたりけり

(同前・巻五)

血のたぎつ輩をここに到らしめし時世のなげきなしと言はめや

西村光弘

も

(同前・巻六)

村井淑人

「勅令下る軍旗に手向ふな」と空に上げしアドバルーンの文字今も瞳にあり

(同前・巻八)

亀山美明

重臣閣僚殺戮されしと知れながら一行も触れぬ新聞をつくる

残雪に腹這ひ 機関銃にねらひつけてゐる、兵の蒼白な顔を見る。

渡辺順三
山下陸奥

つひにかも撃つといふかや天皇の兵が天皇の尊き兵を

大江 徹

尊皇討奸と書きたる白き旗かかげ雪中に銃剣の兵士たちたり

大伴貢吉

兵に告ぐるラヂオに額たれて声呑み泣きぬ妻見れば妻も

飯島布染吉

この惨虐を国民の前に瞭らかに批判せし新聞一つだになし

寺島英亮

テロリズムをうべなふらしき同僚に吾はかたくなに口噤みをり

佐藤忠恕

大君の宮居のほとり騒がして自決したるはただひとりなり

釈 迢空

つつ音を聞けばたぬしと言ふ人を 隣りにもちて さびしとぞ思

ふ

(昭和万葉集・卷三)

二月二十九日、いよいよ叛乱部隊を鎮圧するために武力行使もやむをえずと決意して、戒厳司令部が討伐部隊の配置をおわり、付近の

一部住民の退避をも完了したところで、それまでのピラ、アドバルーン、ラヂオによる原隊復帰の勧告が実をむすんで、叛乱部隊は戦闘態勢を解いて帰順した。軍隊どうしの相撃は避けられたのである。武力鎮圧のもっとも強硬な主張者は天皇であったと伝えられている。叛乱にくわわった皇道派将校のひとり安藤輝三は、

(昭和万葉集・卷三)

心身の念をこめて一向に大内山に光とす日を
という辞世を残しているが、この天皇へのあつい「念」も、「尊皇討奸」の志も、ほかならぬ天皇そのひとよって峻拒され、かれらの企図は挫折してしまった。クーデター後の軍政についての緻密な計画もなく、軍事政権樹立への野望にもえる皇道派將軍たちの事態収拾によつて国家革新の目的を達成しようというあまい期待があつたにすぎなかつたから、その將軍たちが天皇の強硬な態度を知つて、にわか収拾から手をひくと、かれら叛乱將校たちは、孤立無援の状態で放置されてしまったのだ。

竹蔦継夫

今ははや乗るべき願ひ絶えにけり電車のひびき胸にしみるも

中橋基明

三十歳のはかなき夢はさめんとす雲足重く五月雨の降る

(昭和万葉集・卷三)

このふたりの叛乱將校の歌には、行動挫折の絶望感がただよっている。「昭和維新」断行の夢は破れたのである。

部隊までも出動させたこのクーデター未遂事件は、十月事件・三月事件・五・一五事件などにくらべて、未曾有の大規模な事件であったばかりでなく、天皇の軍隊を天皇の許可なくごかしたという点で統帥権を干犯したという問題もはらんでいた。したがって叛亂將校たちが、私兵として動かした部隊の兵士たちは、「上官の命は朕か命と心得よ」という軍人勸諭の一条を守ったにすぎなかったのに、あやうく逆賊あつかいをうけるところであった。かれらは帰順すること、それをまぬがれたのである。

この大事件は、史書において適確に裁かれている。しかし、こだわらざるをえない問題が、ふたつあとに残されたのだ。

そのひとつは、前掲の寺島英亮の短歌「テロリズムをうべなふ」「同僚」の存在と、釈道空の「つつ音を聞けばためしと言ふ人」の存在をみのがしてはならないだろう。このふたりの歌人は、「テロリズム」や「つつ音」を歓迎する隣人を否定的に歌っているけれども、そこに歌われるような人心が、つくられつつあった時代の状況をみのがしてはなるまい。二・二六事件の青年將校たちの蹶起に快哉を叫んだ中学校教師を現実にもっている筆者は、二・二六事件が後の歌集に否定的に詠まれていることを、過大に評価するわけにはい

かない。

そのことよりも、さらに重要視したいのは、この事件を契機に統制派が皇道派を、肅軍の名において徹底的に整理し、派閥抗争のいっぽうを支持したことである。その肅軍という名における対立派閥の整理は、それだけにとどまらず、その勢いをかって、軍部が政治に介入するのを当然とする風潮を助長した。国民にそれをうべなう態勢があり、それに乗じて、五月、軍部大臣現役武官制を復活することによって、爾後の組閣——つまり政治に自在に軍が介入できる道をひらいた。軍、とくに陸軍が気にいらぬメンバ―の内閣であれば、陸軍大臣を推薦しなければ、組閣は不成功におわり、流産せざるをえないという、政治を左右できる軍部独裁の道をひらいたのである。さつそく翌年一月、宇垣一成内閣の成立を、この手で阻止している。これは、これからあとの日本の政治指導者にとって、軍部迎合の方向をとらざるをえない、せびめられた政治の方向をとることをよぎなくさせる制度上の枠組みをつくったのである。

フランスには人民戦線のレオン・ブルム内閣ができ、いっぽうペルリン・オリンピックでヒットラーが、その宣伝映画「民族の祭典」「美の祭典」にはなばなく登場し、平泳ぎの前畑秀子選手の優勝が、河西省三アウンサーの「前畑ガンバレ」の絶叫アウンズによって、日本国民を熱狂させた年でもあった。と同時に、七月、

スペインではファシスト・フランコ將軍のひきいる反政府軍の反乱、ひきつづいて日独防共協定が一月には締結されるという、ファシズムと民主主義の対決の様相をあらわにした年でもあった。

2

ここで、日中全面戦争へ展開する一九三七（昭和一二）年があげられる。北京郊外の盧溝橋での一発の銃声が、日中戦争の不幸な端緒となつたのである。この時点で、とくに指摘しておきたいのは、中国との戦争で、“負けるかもしれない”という危機感を、ほとんどの日本国民はもたなかったということである。日清戦争いらい、“中国は日本の敵ではない”という優越意識が、おおくの日本人の意識となつていたからである。当初、中国との戦いは、連戦連勝であつて、それがとうぜんとされてきた。この中国にたいする優越意識が、のちの太平洋戦争へふみこむ蛮勇のひとつのステップになつたとみて、さしつかえないであらう。しかし、中国との戦争においては、心ある人たちは樂觀的ではない、決意・悲哀をもつていたのである。

荒川左千代

歌謡曲のなかばに臨時ニュースありて北支に兵が立ちゆくと言ふ

福田栄一

事変ニュースのラジオひびける道の上を足かたく踏み我は歩みぬ

高木園子

まぢかくを音たてて飛ぶ弾丸におのづから心定りにけり

竹村 豊

背中より受けたる弾にたふれぬる支那の兵士は二十歳をすぎず

石川 清

屍しかばねは避けむと思へ疲れるて馬も踏みゆき我も踏みゆく

渡辺周一

首都めざし潮とせまりゆく兵も落ちのびてゆく兵も悲しも

三田濤人

江岸ながたに追ひつめられし敵兵ら水へをどれど行方知られず

（昭和万葉集・巻四）

このように、中国との泥沼に足をとられたような戦争にふかいらし、やがてその延長としての太平洋戦争へと展開していったのである。が、この中国との全面戦争は、いたるところで、日本はその民族としての誇りをみずからけがす行為を展開した。その最大のもののひとつが南京攻略の際の大虐殺である。右に掲げた歌の最後に「江岸に追ひつめられし敵兵」とあるけれども、正規の中国軍隊の兵士ばかりでなく、一般の住民も差別なく殺戮の対象となつたことは、拙著『戦時下の作家と作品』（未来社）の『生きてゐる兵隊』の項で、南京攻略軍の旅団長・佐々木到一の手記を引用して言及し

ているので、詳しくは述べない。殺害者数については諸説あるけれども、戦後の極東裁判では二万五〇〇〇人、南京での戦犯裁判では三〇万人と指摘されている（藤原彰『日中全面戦争』／小学館『昭和の歴史』⑤▽一〇四ページ）。いずれか確定しがたいが、とにかくおびただしい殺人の修羅場であったことはたしかである。

三田 滯人

二万余のいのちたちまち滅びしとわが驚く前のしかばねの山

西沢 豆道

銃剣構へわめき刃向ふ兵四人たくましければ斬りて斃しぬ

振り翳すわが軍刀に手向はず背円めてうち伏しにけり

堀川 静夫

焼打の煙薄れて城壁は夕日を受けて現れにけり

富めるものみな避難して食へぬもの傷つけるもの衛にあふる

渡辺 年応

戦闘帽あみだにかぶり引かれゆく少年兵等草鞋うがてり

小夜更けてもの思ひ居れば吾が撃ちし敗残兵の面浮び来る

（昭和万葉集・巻四）

南京大虐殺のあとの歌とおもわれるこれらの歌のなかで、三田の

「二万余」というのは、おそらくその当時の噂であろうが、その

「二万余」でも想像を絶する数字として驚愕している感情を読みと

ることができる。西沢の二首は戦闘現場における緊張感が表現されているが、戦闘のその場にみずから当事者としてたたなければ、その心理状態は理解できないところであろうが、「たくましければ斬りて斃しぬ」（傍点筆者）というのは、あとからのいいわけである。斬らなければ斬られるという恐怖心からでてきたことであることは理解できるが、「背円めてうち伏す敵兵を斬る心理とつなげて考えてみると、「たくましければ」という理由づけは、作者のいいわけにすぎないとおもうのは、おもいすごしだろうか。南京大虐殺の心理的裏面をここにみることができたといえなくもないだろう。まして、渡辺年応の「小夜更けてもの思ひ居れば」という表現は、まったく真実の表現とはいえない、文学の虚構とは似ても似つかないウソというべきであろう。「吾が撃ちし敗残兵の面浮び来る」という、痛烈な殺人の体験が、どうして「小夜更けてもの思ひ居れば」というような悠長な表現になりうるのだろうか。ひとりの人間の生命をうばったものの戦慄的な体験の回想の歌として、その殺された人間の「面浮び来る」場面が、そんなのんびりしたものであるはずがない。これは真情をいつわったエッセイ文学であるといわねばならない。つまり「小夜更けてもの思ひ居れば」という伝統的な短歌表現のパターンにはまりこんでしまうことによって、みずからの真情と、その型式との乖離を自覚しえなかった、歌よみ人の手法のよ

わみを露呈した歌だといわねばなるまい。短歌のパターンには、このように真実に迫ることをさまたげる型的制約がはたらく場合があるのだ。

伊勢崎海花

南京の陥落つぐる揚花火師走十日の今宵とどろく

(昭和万葉集・巻四)

南京の大虐殺は国内には報道されなかったから、国民はたんに敵首都の陥落として、花火をうちあげ、あるいは提灯行列をして素朴に勝利を祝ったのだが、実は南京の現地では中国人のおびただしい血が流れていたのだ。知らされず、信じこまされることの恐ろしさを国民が悟ったのは、戦後になってからであった。

南京陥落のあと、戦線は徐州攻略、武漢三鎮攻撃というように、とめどなく拡大されていった。

中山礼治

石庭に赤きざくろの花咲きて軍は徐州へ立つべくなりぬ

山田耕二

刈り頃の麦踏みしだきつらなりて徐州を目指す軍おびただし

竹村 豊

南北の軍ひとときに押し入りて徐州の街は兵のみが住む

江副一馬

漢口はすでにま近し日の暮れて秋雨のなか鳴群れすぎぬ

加藤逸郎

ころげゐる二十八師の敵兵の死にたる顔のみなうら若き

福島青史

息絶ゆるまでいくたびも母の名を呼びし現役初年兵あはれ

吉本万二郎

抗戦の壁図を見ればこの民等きはひしさを我はうべなふ

(同前)

「麦踏みしだ」かれる中国農民の心情にはおもいおよばなかったであろうし、「うら若き」「敵兵の死にたる顔」をみた日本兵たちは、

すでに南京陥落より約三カ月まえに、中国・国民党と共産党との第二次合作——抗日民族統一戦線——が実現していたことなど、知るよしもなかったであろう。日清戦争いらいの、中国民族を日本民族よりはるかに劣等な民族とみる優越者意識にあいかわらずとりつかれていたから、この徐州攻略戦に報道班員として従軍していた火野葦平が『麦と兵隊』で、「徐州に近づくにつれて、我々は土民が軍隊とともに我々に反抗するのをしばしば見た」と、いかにも意外だといったげに表現しているのも、根底にかれ自身がもっていた「愚昧の民族」という中国民族にたいする認識があつたからにちがいない。それは火野ひとりにかぎらず、日本国民のほとんどがもつてい

た認識であったというべきだろう。そもそも正式の宣戦布告をしな
いで中国侵略にのりだしたと、中国と戦って負けるかもしれない
と予想した国民がほとんどいなかったということにも、その意識は
あらわれていたのである。その侵略ではない、そして正義の日本軍
の正義の戦争という意識は、天皇ももっていたのだ。徐州占領にあ
たっての天皇のいわゆる「御言葉」なるものをみてみよう。

今次ノ徐州会戦ニ於テ我軍力迅速ニ優勢ナル敵ヲ撃破シ赫々タ
ル勝利ヲ収メ得タルハ其作戰ノ計画宜シキヲ得各部隊克ク艱苦
ニ耐ヘテ勇猛果敢ニ行動シ海軍航空部隊亦適切ニ之ニ協力シタ
ル結果ト認メ深ク満足ニ思フ
此旨將兵ニ申伝ヘヨ

〔東京朝日新聞〕昭和13年5月26日夕刊

ここには、当時の帝国憲法に規定されていた外国との交戦にあつ
て、まず天皇がなすべきであった「宣戦布告」をおこなわず、中国
大陸への日本軍の侵略をとうぜんと考えていればこそ、その不法の
戦争の一部をなす徐州会戦に、このような「ほめ言葉」がおくれた
のではないか。天皇は戦後しばしば、のちの太平洋開戦とそれの終
結とは、帝国憲法を忠実にまもった行動であったと強弁しているけ
れども、この中国の戦争について帝国憲法を守らなかつたことにた
いする自己批判は、まったくおこなつたことがない。かれは、みず

から勅語・詔勅・「御言葉」として発した文章を一度でもよみかえ
したことがあるのだろうか。あるいはまた、みずからが統帥権をも
つ日本陸・海軍が中国を侵略しているとき、その不当性にまったく
気づかなかつたのが事実とすれば、天皇もまた日清戦争いらいの国
民感情となつていた民族優越意識にとらえられていたというべきで
ある。かれは戦争責任を道義的にさえもかんじる人間の感覚をうし
なつているといわねばならない。かれの指揮下に日本国民だけでも
三百万人の犠牲者をだしている。侵略した国々の犠牲者は、その数
十倍におよぶといわれている。そのなかで平然としておれる神経、
そういう天皇を信仰の対象としてきた日本国民のおろかしさとい
ましさを、なんというべきであらう。

今中楓溪

畏くも大前近く大御歌をろがみきけば涙とどまらず

(新万葉集・巻二)

金子信三郎

み光の四方に溶け入るおもひなり天皇旗高くわれは拝みぬ

兼松義明

現神すめらみことが歎き給ふ大みことのりに涙あふるる(二・二二
六事件の後)

(同前・巻二)

鶴田比呂牟

大君のふかきみめぐみ数ならぬわがおほ母に天盃をたまふ

(同前・巻五)

保坂嘉蔵

大御代の三朝のみめぐみ浴みにつつ古稀の齢とわがなりにけり

(同前・巻七)

道久 良

大君に捧げしからだ帰り来ておん母のもとにけふ憩ふかも

三好英子

御下賜金古着よ餅よ春を待つ細民街は一時にぎはふ

(同前・巻八)

南部助之丞

大君は神にしませば戦のにはを楽土となしたまふらし

(同前・補卷)

富田清子

元旦の大き赤き陽君が代を歌ひて兵等泣きしと書き来

(昭和万葉集・巻三)

天皇への信仰は国民の精神に牢固として根をおろしているように

みえる。それはひとつには『新万葉集』が、戦時中の応募歌によって編纂され出版された事情が、かかわっているにちがいない。つま

り、そこにはたて、ま、えの歌しか応募できなかったであろうし、選者たちにも時代環境への配慮があつたはずである。だから戦後の『昭和万葉集』のほうが本音の歌がおおく応募され、採録されたこととみることができる。しかし、ねず・まさし『天皇と昭和史』(三一書房)、井上清『天皇の戦争責任』(現代評論社)、渡辺清『碎かれた神』(評論社)、同『私の天皇観』(辺境社)など、天皇の戦争責任をきびしく追及している文章もあるにはあるけれども、それは少数派であつて、戦後のこんにちになつても、天皇への親愛感や尊敬の念はつよく国民のあいだに根づいている。まして敗戦までの日本人にとつては、まさに「大君は神にしませば」というのが、たて、ま、えとしてばかりでなく本音の部分でも実感されていたのだ。だが、「大君は神にしませば」という、古典的表現に抵抗なくはまりこめるところに、かならずしも実感どおりとはいいきれぬ常套的な表現にはまりこめる感情のあることをみのがすわけにはいかない。表現にはまず導され誘導されて感情がつくられるという傾向が、短歌の創作過程にはあるといえよう。だから時代的制約にはまりやすい表現形式であるという限界もみておかねばなるまい。

西尾 杏

やられたやられたと言ひてより陛下万歳と叫ぶまで五分間程の命なりきと

(昭和万葉集・巻四)

というのは、西尾に伝えた戦友の作為がかんじられる。そういう劇的な場面が現実にあったのか。

山野弥三郎

心臓を射貫かれし戦友は天皇陛下万歳を叫ぶ声なかりけり

(同前)

のほうに、リアリティをかんじる。日本の兵士は戦死するとき「天皇陛下万歳」をかならず叫んで息をひきとるといふ伝説を、戦前・戦中に育った日本人ならば、どこかで聞かされたはずである。もちろん、その伝説を信じたか否かは、人それぞれにちがっていたであろう。が、たてまえとしてはそう叫ぶことになっていたのだ。だから、この山野の歌は、そのたてまえをはたす時間もない即死だったのを、その「戦友」のために惜しんでいるのか、そういうたてまえにはなっているけれども、そうでない場合のあることを示したかったのか、あるいはその場合を示すことによって伝説を嘲笑したかったのか、いずれとも判定できないが、そのいずれとも解釈できることをねらって作歌したとすれば、それによって権力の摘発を避けえたわけで、かなりの手練であるといふべきであろうが、はたしてどうだろうか。むしろ、

玉尾延忠

射たれたる兵の臨終にたらちねの母を呼ぶありあはれ人の子

(同前)

というほうが、人間自然の情であつたのではなからうか。しかし、天皇は国民のひとりひとりの中の精神の内奥にまで君臨していた。それがもつともよく顕現したのが、いわゆる「紀元二千六百年」祭典においてであつた。一九四〇(昭和一五)年のことである。

佐佐木信綱

大きき亜細亜あらたにここに興る春皇紀二千六百年のよき春來る

土屋文明

遠き代の神の御代にも國興す苦しみはありき痛矢申負ひて

今井邦子

物資乏しと繰り返いはず神つ代に國を建てましし感激に生きむ

石川たまき

紀元二千六百年の式典に召されたる夫は日々きほひをり

平崎清子

新しき少尉の服を身につけて夫は二千六百年の式に参列す

尾上柴舟

いかめしく深きしじまに大前の大広庭は人無き如し

谷 鼎

大みけに陛下も召しし野戦料理包みて白し人の手に手に

藤原東川

尾崎罌堂

大まへにつどふ民草幾万の中の一人ぞかそけきわれも

北原白秋

天雲の青くたなびく大き陸かくいにしへも和したまひき

(昭和万葉集・巻五)

専門歌人ばかりでなく、一般国民もまた建国「二千六百年」祭典と古代とを結びつけて天皇を神とする信仰とともに、現におこなわれている中国大陸侵略を肯定する思想と、天皇が臨場する式典に招かれた光栄に感激しきっている国民の姿とが、如実にかがびあがっている。ながびく中国との全面戦争に倦み疲れてきて、戦意高揚に一抹の倦怠感がただよいはじめてきていた国民感情に、一段とつよいタガをしめなおして、ついで展開される太平洋戦争へむかつて国民感情の再組織の役割をはたしたのが、この祭典であったといえるであろう。しかし、このはなばなしい祭典のかけに、日本の前途を憂えていた少数の人びともいたのである。

土岐善麿

紀元二千六百年の初日にむかひ愧づることなくあるべきわれか

小泉頼二

皇紀二千六百年われやことほぎまつれどもかなしむまでに国の危
機来ぬ

天皇・戦争・国民

世の人は只めでたしと祝へども我は沈みぬ深き憂へに
政党は我が説けるごと自殺せり憲政もまた殉死するらし
敗れなばヒ氏とム氏とは自殺せん我大君はいかがしたまふ

南原 繁

祖国の上にいよいよ迫り来らむものわれは思ひていをし寝らえず
くるほへる世界の兇暴のまへに起ちて誰れぞこれを阻まむものは

石川武美

支那事変はじめし日よりけふまでの不用意日本をわれはかなしむ
新聞はあれど知りたき真相は知るよしもなき世にてありけり

大平善梧

言論の統制重く新聞の活字のうらをよみとらんとす

大東亜圍きづく期待を生徒等は信じをるなり吾よりも強く

(同前)

しかし、これらの良識派は少数で、しかも孤立をよぎなくされて
いた。これらの歌には、戦後にはじめて発表されたものもあるようだ。

これよりさき、日本陸軍の最精鋭を呼号していた関東軍は、満蒙
国境のノモンハンで、ソ連軍の近代化された機甲部隊と空軍に徹底
的な敗北を喫したが、その実情は国民に知らされることなく、軍部
はまたその戦訓をいかすこともなく、太平洋戦争に突入するにいた

ったのだ。

3

ながびく日米交渉の停滞に国民のおおくはおもくるしい焦燥感を
いただいていた。中国との戦争には勝敗について楽観的であった国民
も、一九四一（昭和一六）年十二月八日朝の対米英蘭戦争の開始は、
異常な緊張感をもってむかえた。

田中みゆき

日米が正に戦ふこのニュース類こはばりて我はききあつ

平井乙磨

宣戦のピラに痺れしごとき街今朝のしづけさ嘗てみざりき

橋本辰雄

八日の朝生徒の前にをのきつつ日米英の戦ひしらす

（昭和万葉集・巻六）

わたしたち大学生は、兵役の義務にしたがって、やがてこの大戦
争に参加しなければならぬ運命が決定的になったこの現実を、悲
壮感をもってむかえた。「人生二十五年」ということばが、若者の
口へのぼりはじめたのは、この戦争からであった。もとより、

南原 繁

人間の常識を超え学識を超えておこれり日本世界と戦ふ

というような良識にさせられた冷静な認識など、あろうはずがな
かった。

高田幸夫

宣戦の詔書奉読につつまみてラジオの前に帽子をとれり

森 快逸

らうらうと大詔よむ聞けば愈命ささげむと思ふ

（同前）

という庶民のうけとめかたとくらべて、専門歌人たちはどうであつ
たか。さいわい雑誌『短歌研究』（改造社）昭和十七年一月号が、
著名歌人二十名による《宣戦の詔勅を拝して》という特輯をくんで
いて、各人五首ないし十六首（前田夕暮のみは散文で開戦の感激を
語り、明治天皇の歌二首を引用して、みずからの歌は一首である）
を発表しているので、そのなかから一首ずつを紹介したい。

北原白秋

天皇の戦宣らす時をおかずとよみ揺り興る大やまとの国

吉井 勇

勝たむ勝たむかならず勝たむかくおもひ微臣のわれも拳握るも

岡 麓

大御稜威かしこくもあるか戦争は必勝つにさだまりにけり

川田 順

たたかひは朕が志ならずと宣り給ふ大詔勅にいのちは捨てむ

尾山篤二郎

詔 耳にかしこみ眼は熱し何たゆたひのあるべくもなし

土岐善磨

ルーズヴェルト大統領を新しき世界の面前に撃ちのめすべし

相馬御風

あじあの敵人類の敵米英を今こそうてと神宣らしたり

與謝野晶子

日の本の大臣相も病む我も同じ涙す大詔書に

石樽千亦

天地の神もきこしめせ世の為にみはかしとらす大みことのり

窪田空穂

皇国の海軍を見よ世界いま文化の基準あらためぬべき

斎藤茂吉

大きみの統べたまふ陸軍海軍を無畏の軍とひたぶるおもふ

金子薫園

大詔を宣明する東條首相の全身は聲になりてひびく

松村英一

髪あかくまなこの碧き異つ国撃ちて浄めな攘ひ和さな

前田夕暮

えんえん燃ゆる巨大な日の、十二月八日のこのひと時を今を

半田良平

皇紀二千六百一年を境として世界史は大いなる転換をせむ

金子元臣

現つ神わが大君の御ころに背きし奴しが面割がむ

武島羽衣

御民われら燃ゆる一つの弾丸となりてうち砕きてむあたる国

土屋文明

大勅のままにまに挙る一億を今日こそ知らめアメリカイギリスど

も

尾上柴舟

今よりは日本洋と名をかへむ御国のものぞ太平洋は

佐佐木信綱

大君のみことのまにま臣民皆が国に殉ふ時し来れり

これら令名たかい歌壇の指導者たちが、天皇の宣敕の詔勅にたち

どころに歓呼の歌声をあげたのは、つねづねそれぞれの結社で短歌

指導の先頭にたってきたその実績を背景に、この重大な戦争に対応

する国民としての姿勢をはやばやと示そうとした指導者意識のあら

われであったのだろうか。この特輯号は奥付が「昭和16年12月29日

印刷納本、昭和17年1月1日発行」となっているとところからみると、開戦匆々にこれらの歌人たちは作歌の要請をうけた事情のあったことが推測される。が、それにしてもかりにも格調がたかいたとはいえない歌がおおいのは、前掲の庶民たちのつつましい歌にくらべて、眼をうたがわせるものがある。これらの歌は歌というよりも大言壮語というべきである。歌という表現にとつてなによりもだいいじなはずの作者の「私」が、この特輯の歌のほとんどから消えさつていくことが最大の特徴であろう。「私」が「天皇」や「国家」のなかに溶解してしまっているだけ、観念的な叫びにならざるをえなかつたのだ。それによって指導者として国民に範を示し、責任をはたそうとしたのかもしれない。が、実際には戦時下の短歌の方向を決定づけ、短歌不毛の時代をひらく先達の役割をはたしたといつても過言ではあるまい。とくにかれらがその道の権威者であつただけに、その役割を有効にはたしたといわねばならない。ただひとり、すぐる日露戦争にさいして「君死にたまふことなかれ」をうたつた與謝野晶子は、この連作のなかに、

水軍の大尉となりて我が四郎み軍にゆくたけく戦へ

子が船の黒潮越えて戦はん日もかひなしや病する母

とうたつて、わずかに私情を保持しえている。もとよりそれは、往年の「すめらみことは、戦ひに／おほみづからは出でまさね」とう

たつて毅然とした態度をとつた立場からは、とおくへだたつていゝが、未曾有の巨大なこの戦争をまえにして、私情をすてさつたほかの歌人にくらべて「天皇」や「国家」のみに歌のよりどころを求めなかつたことは、評価すべきであろう。

嗟哉信子

試験受けに入りし室の黒板は宣戦布告を告げてゐたりき

間崎佳子

米英に宣戦布告ありし日の昼を静かに花を活けかふ

増田哲郎

工場よりかへり常のごと明るき燈にむかひ本読む宣戦の日に

(昭和万葉集・巻六)

このような静かな日常を保っていた庶民もいたのである。

しかし、真珠湾奇襲の戦果やマレー沖の英艦隊撃沈の詳報がつかえられると、様相は変化してくる。

水上すゞ子

みいくさとともに戦ふよろこびは胸にしたぎる勝たざらめやも

水谷静子

戦火まさしく暁をつく南海空路撃墜機すでに二百二機といふ

服部直人

わかき君死を希ひつつうるはしき機とひたむかふホノルルの空

〔短歌研究〕 17年1月号)

土岐善磨

水柱火柱あげてことごとくアメリカ太平洋艦隊覆滅す

ノツクスよアメリカ海軍長官よアメリカ海軍は何処にありや

川田 順

この艦かほら新嘉坡に著きし日のおもひあがりよ今はいづこに

植松寿樹

ルーズベルト、チャールルが輩ふためきて色失ひし其の面を見む

まつろはぬ敵たかあるきはみなほ征かむ黒潮を越え赤道を越えて

マレー沖に轟沈こうしんされし敵艦のまだありし間が撮とられてあはれ

鹿兒島寿蔵

天照らす日の大神のみそなはす国にむかひて何する者ぞ

土屋文明

翼よくを起し白條はくじょうにつき滑走す鳴咽なうげんは迎ふ生死しに超えし映写像

ハワイ戦たたかへる君が歌十首涙をたりて我等よみ合ふ

窪田章一郎

民族が究めいたれる優秀さ陸海軍に顕れ輝く

(同前・17年2月号)

最後の窪田の一首は、開戦当時の知識人の思想と心情をもっと

も適確に表現しているといえよう。明治維新らしい西欧やアメリカ

にたいして、科学的・文化的後進意識をもちつづけ、それゆえの

「追いつけ、追い越せ」という自己鞭撻であったところにもつてき

てのこの大戦果は、科学の粹とみなされてきた軍事力において米英

両国を圧倒したというまぎれもない事実が示されたことによつて、

知識人たちは科学・文化の勝利を実感した瞬間、科学的・文化的後

進意識の重圧から解放されたのである。それどころか世界に冠たる

日本の科学・文化の先進性を確信させたところに、太平洋戦争緒戦

の勝利の文化史的意義があつたといふべきであろう。その当時の大

学構内の様相は、明治人・教授たちの得意満面の笑みをたたえた様

子と、いよいよこの戦争への参加を強制されることが、確實になつ

たと覚悟せざるをえなかつた私たち学生の暗い不安な表情とは、こ

ころある人がみたならば、いたましい対照であつたにちがいない。

知識人たちのこの後進意識からの脱出ということをめきにしては、

当時の知識人中の知識人——学問の最高峰として畏敬されていた人

びとのあの狂態は理解できないであろう。

北白川の下宿街で、深夜、声だかに「軍人勅諭」の暗誦練習を学

生がはじめたのも、この開戦からであった。もし入営・召集が陸軍

であつたばあい、この「勅諭」が暗誦できないと、手ひどいしうち

をうけるといふ風評が学生のあいだで信じられていたからである。

奈落へひきずりこまれるような陰惨なその声のひびきは、いまでも忘

れることができない。それを陰惨とかんじたのは、聞くほうに戦争参加への戦慄と絶望があつたからであらう。

しかし、真珠湾に特殊潜航艇で突入、その海底に散つた九人の海軍軍人による「特別攻撃隊」について、開戦の十二月十八日、概要が公表され、翌年三月六日詳報が発表されると新聞はたちまちかれらを「軍神」にまつりあげた。これよりさき二月十一日に連合艦隊司令長官・山本五十六が、この「特別攻撃隊」に「武勳拔群なり」という感状を与え、それが天皇にも「上奏」された旨が、同時に発表されている。その山本は、

益良雄のゆくどふ道をゆききはめわが若人らつひにかへらず
比ひなき勳をたてし若人は永久にかへらずわが胸痛む

(昭和万葉集・卷六)

の二首をのこしている。前の一首が哲学者・田辺元の歌稿メモに採録されていたのが『昭和万葉集』巻六に田辺の歌としてだされている(「月報」で訂正された)が、田辺がどういう心境でこの歌を記録したか、わからない。が、なにほどの共感があつたとみるべきだろう。

斎藤鬼淵

特殊潜航艇なるものは己が身を捧げし兵の肉弾なるらし

中根貞彦

特殊艇の記事に読み入る人の目の光れる見ればわれさへ泣かゆ

中村俊文

還らざる九人の面影に付されたる年齢はあまりに若くかなしき

(同前)

窪田空穂

大いなる任務を己がものとせるますらを九人みな年若し

とこしへにすめら御国がもつころ九柱の神とあらはる

石博千亦

哨戒の網もぐり来て潜望鏡にうれし敵地の著くうつり来

遠々し海ひそみ来て今の今敵国に放つ第一弾ぞ

広野三郎

大君はかしこきかもよ軍の奏上を聞かしたまふと御寝まします

(「短歌研究」17年4月号)

いずれも特殊潜航艇の構造や性能を知らされていない段階での斎藤と中根の歌だが、全員戦死(じつは一名捕虜になっていたことが戦後に判明した)とうけとれる発表であつたので、未帰還覚悟の艇と実感してこの歌をつくつたのであらう。のちのアメリカ軍のフィリッピン反攻作戦から日本陸海軍が採用した飛行機による特攻——操縦者の生命とひきかえに敵艦の撃沈をねらつた戦法に肯定的であつた国民心理に共通するものが、この特殊潜航艇による真珠湾攻撃

の報道をうけとめるにあたってはたらいたといふべきであらうか。天皇に命をささげること自他ともにかぎりない美をかんじてきた。明治らしい日本人の悲しい姿をみることができる。

また、中村俊文と窪田空穂は、いずれも九人の年齢の若さをうたっている。九人のうち最年長二十八歳、最年少二十一歳、平均二十五・三歳という若さについて、中村の歌がその若い命をいたましく惜しんでいるのたいして、窪田の「みな年若し」は、それを「惜しむ」というより、上の句の「大いなる任務」と対応させてみると、若いにもかかわらず前人未踏の大任務をなしたとげたという、賛美の気持がつよいとみなければなるまい。さらに石樽にいたっては、好戦的な心情でしかなく、かれらのむざむざと散らされた青春へのおもいやりは、ひとかけらもみられない。

広野三郎は、新聞報道にもとづいてであらう、天皇の軍務精励への感激をうたっているのだが、広野の心情や意図をこえて、客観的には開戦当初、捷報を寝もやらず待つ天皇の姿を伝えている。この姿と、十二月八日の米英への宣戦の詔書に、米英と戦端をひらくにいたったことを「洵ニ己ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ」といった天皇と、その二日後、山本五十六に与えた勅語に、

連合艦隊ハ開戦劈頭善謀勇戦大ニ布哇方面ノ敵艦隊及航空兵力ヲ撃破シ偉功ヲ奏セリ

朕深ク之ヲ嘉尚ス将兵益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ

という天皇とを、どうつないで理解したらよいか。さらにこの二日あとは「敵英国東洋艦隊主力ヲ南支那海ニ殲滅」したことを「朕太タ之ヲ嘉ス」という勅語を山本五十六にあたえている。井上清は、この頃の天皇の心理を「木戸幸一日記」などを資料に、「天皇裕仁はすこぶる満足であった。彼は陸海軍部隊に、その功を賞し、いっそうの勝利を上げます勅語を、つづけざまにあたえるのにいそがしかった」「天皇の得意満面のさまがよく見える」（『天皇の戦争責任』／現代評論社／一五七―八ページ）としている。「将兵益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ」と命令できる天皇には、九人の青春のいたましい散華という現実はもちろん、この大戦争でこれから失われるであらう、あまたの人命について、思慮をめぐらす感覚に欠けていたのではないかとおもわれてならない。「臣民」が天皇のために死んでゆくのをとうぜんとする感覚と思想がかねはあったのではないか。「十五年戦争でうしなわれた人命は約三二〇万名。そのうちわけは、戦死または戦病死した軍人・軍属および準軍属約二三〇万名、外地で死亡した民間人約三〇万名、内地の戦災死亡者約五〇万名」、日本が侵略した「中国では、軍人の死傷者約四〇〇万名、民間人の死傷者約二〇〇〇万名」（木坂順一郎『太平洋戦争』／小学館『昭和の歴史』⑦／一四一―一五ページ）、そのほかの侵略

した外地で他民族がおむつた被害は、こんにちなお推定しがたい数字にのぼるとされている。これだけの膨大な人命がうしなわれているのに、一九六三（昭和三八）年八月十五日の政府主催・全国戦没者追悼式らしい、毎年、天皇は「胸の痛むのを覚える」といいつづけてきたものの、自分の戦争責任を道義的にも認めようとなしないうところに、感覚欠如を指摘するゆえんがある。

そればかりではない。一九七五（昭和五〇）年十月、アメリカ訪問から帰国して、はじめての記者会見をした天皇は、記者の「いわゆる戦争責任について、どのようにお考えになっておられますかおやかがいいたいします」という質問にたいして、「そういう言葉のアーヤについては、私はそういう文学方面はあまり研究もしていないのでよくわかりませんから、そういう問題についてはお答えが出来かねます」と答えている。この無神経、この無感覚、この無責任に憤怒の情をいだいたのは、わたしひとりではあるまい。さきの「胸の痛むのを覚える」というのが、まったくの心にもない虚辞であることは明白ではないか。

この九名の決死行が、国民の戦意高揚にはたした役割は、はかりしれないものがある。菊池寛をはじめ、著名人たちが感激をこめた談話を発表しているし、また、いわゆる「軍神之家」の木札をたてられた九名の実家は、各地からくる訪問者の応接に忙殺されたとい

う（木坂順一郎、前掲書、七〇ページ）。そういう熱狂的霧囲気のおかげで岩田豊雄（獅子文六）が小説「海軍」を書くことになる。当時朝日新聞の海軍担当記者・杉本健の回想によると「私は岩田がフランスの近代劇を翻訳したのを読んだことがあるので、この話は題材から考えて意外に思ったが、岩田はたいへんな意気ごみで、とうとう話は決まり「海軍」という連載ものが、七月一日から十二月二十四日まで百七十六回つづいた」（『海軍の昭和史』／＼文芸春秋／＼二九四ページ）という。岩田がみずからすすんで朝日新聞社にでかけ、連載執筆を懇請し、しかも筆名でなく本名で九名のなかのひとり横山正治をモデルにして書いたところに、岩田の感動が、いかにふかかったかが推測される。この小説は青少年ばかりでなく、おおくの大人たちも新聞の配達を待ちかねたと伝えられている。

しかし岩田が「海軍」の連載をはじめ一カ月まえ、日本海軍は一九四二（昭和一七）年六月、ミッドウェー海戦で空母四隻喪失、戦死三五〇〇名という大敗北を喫していた。もちろん大本営はこの真相を発表せず、あたかも日本海軍が勝利したかのような印象をあたえる虚報でごまかしていた。国民が真相を知りえたのは戦後になってからである。このミッドウェー敗戦を契機に戦勢は逆転して、アメリカが攻勢にうつり、日本は守勢いっぽうの戦いをしいられる

ことになったのである。

が、ミッドウェー海戦にいたるまでは、まだ日本軍の勝利がつづいていた。二月のシンガポール、三月のラングーン（ビルマ）占領、五月の珊瑚海における機動部隊同士の海空戦の勝利などがあり、そのいずれのばあいにも天皇は勅語をくだして「嘉尚」している（千田夏光『天皇と勅語と昭和史』／汐文社／三四一―三四五ページ）。シンガポール攻略にあたっては、志賀直哉・谷崎潤一郎までが、そのよろこびをラジオをとおして表明している。

高崎正秀

しんがぼうる既に陥ちたり。今し今、勝つて兜の緒はしめざるべからず

齋藤 瀏

ルーズベルト泣くはよろしもその顔はけだし笑ふに不似合の出来

（『短歌研究』17年4月号）

齋藤茂吉

我が機動部隊面前めんぜんにこのこと現はれたりし母艦ハーミス

四賀光子

南方のいくさに死すとその妻のつゆ乱れざるみ文かなしき
す）
（戦友歌死）

下村海南

日の本の御民と生れ国のためさ、ぐる命の尊きろかも

神山裕一

勝ちたりと待ちし報せは今聞けり印度洋を圧せるみ艦おもほゆ

（同前・17年5月号）

水上すゞ子

海域は涯し知らずも大御軍征き征くと拓く大東亜海

佐佐木信綱

白たへの花傘かざしいつぎいつぎ神の兵天より降る（落下傘部
を看）
（隊の映画

窪田章一郎

大東亜の海にアメリカの拠点消え今日をさやけしコレヒドール島
陥つ

（同前・17年6月号）

植松寿樹

軍人とするからは親の覚悟あり一人子といへどためらふ勿れ
ぬきんでて功立てむこと願はねど己がつとめを遂げずは止むな
（海軍機関学校）
（に在る子に）

中島哀浪

勲章を子ろに代りていたたくやいのちは激つ兵の父われの
大君の南はさらさらさらひろし珊瑚海々戦勝ちにけるかも

(同前・17年7月号)

ほとんどが戦勝にかかわる歌であって、その勝利による高揚した心情をうたいあげているが、四賀光子の夫を戦いにうしなつた友への悼み、中島哀浪や植松寿樹のように、わが子の死の体験、あるいはその予感におびえながらも世をはばかってタテマエをうたわざるをえなかつた当時の父親としての感情表白は哀切である。とくに中島の、わが子の戦死という冷厳な事実のまえにたつて勳章をうけとらねばならぬ親として、「いのちは激つ兵の父われの」とうたう、その「激つ」にはおそらく親としての悲しみを基調にもっているはずなのに、子を死にいたらしめた敵にたいする憎しみにみちた「いのち」ともうけとれるような表現をとつたところに、当時、私情をすなおにうたえなかつた時代の制約がかんじられるといえば、いすぎだろうか。というのは、つぎに珊瑚海海戦勝利の歌がきているのは「いのちは激つ」の本心を韜晦するカモフラージュではなかつたかとおもわれてならないからである。しかし、さらにいっぽうでは、同誌同号に、

伊藤 豊

若葉吹く風のひかりに馬の瞳もみどりに潤む夏いたりたり
 稲植うる手もとの水の光より汗づく顔のけだかさを見し
 のような、戦争とはかかわりのない世界もあれば、

川口千香枝

つれだちて短歌展覧会に來りたまふ白衣戦盲の見えぬ人々よ
 繻帯に眼鼻おほはれ傷兵の火傷の面を見るに堪えずも
 のような、戦争のいたましく悲惨な側面をとらえたのも併存している。戦争の渦中であつて、国民はさまざまな対応をみせていたのである。

阪口 保

螢ひとつを葱の管葉に押しこめて帰らねばならぬ家のサチコを思ふ

(同前・17年8月号)

黒江太郎

人妻の少女に似たる振舞をゆるすが如く暑き日を居り
 清らけき処女の頃を知るゆゑにきよく妻さびしさも妬ます

氏家 信

夕立の晴れてすがしも落葉松の夕陽をうけて木ぬれきらめく

(同前・17年9月号)

戦争とまつたくかわりのない日常生活をひそやかに生きていた庶民の姿や心情は、「私」に固執しなければ描くことができなかつたであろう。短歌には、さきの斎藤瀧の歌のように歌ともいえぬ罵倒におちいる危険と、「私」に執着してわずかに自己を保ちうる長

所とがあつたといわねばならない。

しかし、戦局はミッドウエーの完敗のあと、急速に劣勢の一途をたどることになった。

その最大の転機は、同年八月からのガタルカナル島での攻防戦であつた。これもまた敗北して退却したことはいわずに、大本営は「転進」という苦しまぎれの新語を發明したのだ。吉田嘉七はこの島での戦闘に投入されて、「弾丸なく、食なく、葉なく、軍隊とは言え病人の集団であつた」(『定本ガタルカナル戦詩集』△創樹社▽二五八ページ)という悪条件下で詩を書きつづけていた。

当時、書きつけていることで、自分を支えていた。とてもこのままでは死にたくない。

顔の皮膚が見えないほど蛆をわかし、紫色になった鞆丸を大きく膨らせ、見る見る腐敗してゆく戦友たち。他人を埋める体力も無く、倒れた形に放置されてジャンゲルの泥に同化して行く餓死体を、こちらもマリアで四十度の熱を出しながら、来る日も来る日も見ていると、気が狂わない方がおかしいかもしれない。

(同前)

こういう苛酷な戦場にあつて、多数のすぐれた詩を書きのこしているが、「挽歌」と題するつぎの一首は、読むものこのころをつよくとらえる。

我すらもかく悲しきに、

母君は

よくぞ散りしと

のたまうべくも。

高木八郎

たのみ来し水菜も溪に尽きたれば檳榔の芽をむしりて食ひつ
炸裂する砲弾の中に忘れぬしひもじさはまたも激しく襲ふ
軍刀もて大蜥蜴追ふ戦友をわれは見てゐつ氣力失せつつ

海辺正民

精兵が一万六千果てたりと霹靂の如くわれは聞くかも

(昭和万葉集・巻六)

アメリカ対日反攻作戦の第一歩としてはじまったガタルカナル島の戦闘は、約半年のはげしい消耗戦ののち、ようやく一万名の残存兵(『図説・昭和の歴史7太平洋戦争』△集英社▽六八ページ。これによると日本軍の死者は二万五千とされ、その過半数が餓死という)が救出されて、翌年二月に終熄したのである。これ以降、連合軍は島伝いの北上作戦を展開し、ついに沖縄にまでいたるのだ。

この年も暮れようとする十一月下旬、文学報国会が情報局の後援によって『愛国百人一首』を選定・発表した。国民一般に愛国歌の推薦をもとめたところ、その数十二万首に達したと報ぜられている

〔朝日新聞〕昭和17年11月21日。そのなかから選定委員、佐佐木信綱・斎藤茂吉・斎藤瀏・川田順らによって検討がかなられ、百首を決定して十一月二十日に公表したのである。

翌年三月、毎日新聞社が出版した日本文学報国会編『定本愛国百人一首解説』における窪田空穂執筆の「緒論」によると、「上は、具体的にいふと萬葉集時代を限度とし、下は、幕末、即ち明治維新前に物故した人までを限度とすることとした」「選出の短歌は、年代順に排列することとした」（八ページ―九ページ）という。さらに「歴代の天皇の御製歌中には、愛国の歌として見て、襟を正さしむるものが多い。これを如何に扱ふべきかについて、宮内省の指図を請ふこととした。宮内省では遠慮すべき旨を諭された。遠慮は御製歌にとどまらず、皇族の御歌にも及んだのである」（一〇ページ）ともいう。たいへん用心ぶかい配慮であった。

柿本人麻呂

大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも

栗田土満

かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが楽しさ

などのように、この「百人一首」の基調となるのは、天皇を神とする思想であり、その神である天皇への殉忠こそが民草の最高の道であるという精神的志向であろう。

高橋虫麻呂

千萬の軍なりとも言拳せず取りて来ぬべき男とぞ思ふ

山上憶良

をのこやも空しかるべき萬代に語りつくべき名は立てずして

海犬養國麿

み民吾生けるしるしあり天地の栄ゆる時にあへらく思へば

雪宅麻呂

大君の命かしこみ大船の行きのまにまに宿りするかも

田中河内介

大君の御旗の下に死してこそ人と生れし甲斐はありけれ

丈部人麻呂

大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母をおきて

今奉部與曾布

今日よりはかへりみなくて大君のしこの御盾と出で立つ吾は

児島草臣

しづたまき数ならぬ身も時を得て天皇がみ為に死なむとぞ思ふ

天皇の戦士たちが出陣にあたって、こころ決するよりどころに、神である天皇を仰ぎみて、そこに死を前提とした決意がうたわれたのである。それらの歌をこの「愛国百人一首」に採録することによって、選者たちは目下たたかわれている太平洋戦争にいやおうなく

投入されてゆく若人たちに、自己説得のための精神的な材料を、「古典」あるいは『愛国百人一首』という名の權威によって提供したのだ。戦後出版された『はるかなる山河に』や『きけわだつみのこえ』（いずれも東大協同組合出版部）にみられるような、当時の若い人たちの戦争という現実をまえにした内心のさまざまな葛藤にたいして、なにほどかの影響をあたえただろうか。その確証とみるべきものはない。また、つぎの歌などは、戦地と銃後とをむすぶ歌としてうけとられたのではあるまいか。

遣唐使使人母

旅人の宿せむ野に霜降らば吾が子羽くくめ天の鶴群

安倍女郎

わが背子^{せこ}はものな思ほし事しあらば火にも水にも吾なけなくに

多治比鷹主

唐国^{かごく}に往き足らはして帰り来ますらすら武雄^{たけお}に御酒^{みき}たてまつる

戦地の子を案ずる母親の心情でもって「旅人の宿せむ野」をよみとったひとつもいたであろうし、あきらかに夫への恋歌（万葉集巻四に「今さらに何をか念はむうち靡^なき情は君に縁りにしものを」と並記されている）であるにもかかわらず、戦場に夫を送っている留守居の妻の覚悟としてうけとられたかもしれない。唐国に使いして任務完遂のうえ無事帰着を祈る送別の歌も、惜別というより、家人

の凱旋の日のよろこびがつよく印象としてうけとめられていたかもしれない。選者たちは、この『百人一首』の選定歌を、戦争状況のなかで、どのように位置づけていたのだろうか。もう一つの傾向にふれておきたい。

宏覚禪師

末の世の末の末まで我が国はよろづの国にすぐれたる国

中臣祐春

西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと島根ぞ

藤原為氏

勅として祈るしるしの神風に寄せくる浪はかつ砕けつ、

これらは、まさに神国日本が万国に優越していることを確信している精神の汪溢している歌である。この選歌の段階で、ミッドウェーの完敗も、ガダルカナルの敗北もしらず、まだ緒戦いらいの各戦闘における勝利の報道にかちどきをあげていた選者たちの勝利を確信している意識が、これらの歌の選定の基準としてはたらいたであらうと推定される。神である天皇をいたたく日本の国が、すべての国に冠絶する優越性をもつという、古典いらいつちかわれてきた、その意識構造の伝統をこの『百人一首』によって、再確認し強調しようというのが、選者たちのねらいではなかったか。その意識をとおしてみずからが参加させられる戦争を正義のいくさと認識し、そ

れに生命をささげることの意義を、天皇とのつながりにおいて承認させようというのが、この『百人一首』の全体構造であったといえよう。しかし、選者たちのそのような意向にもかかわらず、この『百人一首』が、さほど国民に愛誦されたという確証をみつけることはできない。が、この年の後半になるにつれて、国民の歌ごえはさまざまにこだましている。

川上貞子

聖天子上にまします明かき世に餓えて死すともひもじくはなし

樋詰正治

大君のみいくさびとと許されし台湾志願兵の五百七名

〔短歌研究〕17年9月号

今井篤三郎

持たすべき品あれやこれ控へつ、子の征かん日を今より妻は

四賀光子

帰りこぬ機の三十機そのなかのきみが一機を思ひしむわれは

岡山 巖

見よ天に冲する水煙あひつぎて早やも二裂に燃え燃ゆる艦

〔同前・17年10月号〕

村野次郎

祖先よりの血をばたのみて後れじとふるひ起ちけむわが弟は

天晴れな戦死をされしぞよろこべとうべなふ義妹にいひてあはれむ

〔同前・17年11月号〕

相馬御風

まな おほみことつねにあらたしいただきていのちおもはずひたにすすまな

米田雄郎

いふ へーゲルを今は語らず、輓馬曳いて山野三十里行軍したと吾子は

杉本寛一

防空演習の伝令としていでゆきし君倒れたり二十七の君

通りか、りし一女生徒に抱かれてひるの路傍に息絶えたりと

尾上柴舟

われ死なばわが子戦ひわが子死なばその子戦ひ戦ひ遂げむ

〔同前・17年12月号〕

開戦一年にして、暗い影がしだいに国民生活にしみとおりつつあった状況を、うかがうことのできる歌群である。

一九四三（昭和一八）年になると、国民は大本營の景気のよい大戦果の発表にもかかわらず、ひしひしと戦勢の不利をかんじとりは

じめていた。それを決定的にしたのは、この年四月（公表は五月）、連合艦隊司令長官山本五十六が戦死した報道であつたろう。

大本営は、

連合艦隊司令長官海軍大将山本五十六は本年四月前線に於て全般作戦指導中敵と交戦飛行機上に於て壮烈なる戦死を遂げたり

〔朝日新聞〕昭和18年5月22日

と発表した。

原田光男

海の長官戦死せりけり陽の色のすみの極みに罌粟燃えて咲く

横山敏臣

山本元帥戦死の報を街に聞き急き込み帰る何か言ひたく

岩本宗二郎

しづかなる銀座の夕日元帥の遺影祀れる飾窓に射す

佐藤佐太郎

いさをしのうづの光とかがよへる元帥刀をさざげ行きたり

土屋文明

青山南町この小さな路地にしてみ足跡のこりてありと思はむ

（昭和万葉集・巻六）

谷 鼎

ハワイ・マライに豪岩無礙の想成しし山本元帥かくり給ひぬ

天皇・戦争・国民

言挙げぬ皇国のすがた君に見て臣の男子と思ひたのみき

久保田不二子

雲のうへに戦ひ果てし君もへば胸つまりきて言は及ばず

手を挙げて部下励ませる写真見ればゆゑわかねども涙とどまらず

〔短歌研究〕18年7月号

中島哀浪

皇国のいかりきはまりいかづちと最前線に爆ぜし君はや

かへりこぬ部下をかなしみ詠みにけるみ歌はかなし君もかへらぬ

（同前・18年8月号）

今中楓溪

ありし日の歌の姿の高しもといまさらに思ふ君の臨終に

先づわれにつづけと高く空翔りさらにつづけと散りし君はも

（同前・18年9月号）

当時の日本国民にとって、山本長官は海軍の象徴だった。そして

海軍の将兵にとっては、山本元帥のほかに連合艦隊長官を想像す

ることはできなかった。元帥が戦死したころ、旗艦「武蔵」では、

古賀新長官が着任した後もなお、毎日南の空を仰いで山本長官機

の帰来を待つ乗組員が多かった。

〔兄島襄戦史著作集Ⅴ〕〈文芸春秋〉三三二ページ

と兄島襄はしるしている。それは海軍の将兵ばかりでなく、国民の

おおくが無敵の連合艦隊をひきいるのは山本五十六をおいてほかにはないと信じこんでいただけに、機上戦死の報道は国民にとって深刻な衝撃をあたえた。緒戦のハワイ・マレー沖海戦をはじめ、まさに向うところ敵なしといえる海軍の勝利が、ひとり山本の適切な作戦指導の結果とされてきたことによるところがおおきい。いわば山本は、生前すでに国民によって神格化されていたといっても過言ではあるまい。日本国民の精神風土には、チャンスを立てて想像を絶する力を発揮するものがあると、それは神秘化され、絶対化される傾向がある。そしてやがて神格化されるにいたる。戦死するまでに山本は国民のおおくから景仰され、絶対不敗の守り神的存在にまつりあげられていたのである。しかも、かれは歌を数おおく残している。

一九三九（昭和一四）年八月、海軍次官から連合艦隊司令長官に転出してからは、とくに揮毫、書簡執筆、作歌の機会にめぐまれたようだ。戦死のこの年にも、

おほけなく海の護りのみ任に四たび初日ををろがみにけり
 天皇の御楯とちかふまはとどめおかまし命死ぬとも

（昭和万葉集・巻六）

をのこしている。

しかし、国民にとつての悲報はこれにとどまらなかつた。山本戦死の翌五月、アツツ島の玉砕が報じられたからである。北洋アリユ

ーシャン列島のなかの一島アツツにアメリカ軍は上陸してきた。

雨貝 定

アツツ島に敵上陸と聞きしより三日過ぐるも詳報のなし

片桐勘蔵

アツツ島の兵みな死すとしばらくは草鞋も解かず身じろぎもせず

船堂 博

真桑瓜食ひつづぞ聴くものふの二千ことと死ねりしさまを

杉本苑子

アツツ島に死せる兵らのみ名の中に恩師のそれを見出でしおどろき

わづか三月教へを受けし師なれども若きみ声の忘れなくに

（昭和万葉集・巻六）

久保田不二子

アツツ島に血ぶるひたちて戦へるわが皇国の兵は神なる

黒江太郎

北海の遠の御楯とさもらひしみ魂は鎮む大君の辺に

堤 青燕

山本山崎ああこのたけき名将の戦死世界にとどろさわたる

（『短歌研究』18年7月号）

全滅を「玉砕」と美化して呼称した大本営は、つぎつぎにこの用

語にすがらねばならぬ戦争指導の拙劣さをあらわにする。この年のマキン・タラワ両島守備隊の全滅もそうよばれた。それは作戦の失敗もさることながら、その作戦の根底に日本の軍隊に特有の人命軽視の思想がよこたわっていたことを見のがしてはなるまい。人員・糧食・武器弾薬についての補給計画をまったくもたない戦線拡大作戦は、そのもつともいぢるしいあらわれというべきであろう。つぎの歌はその悲惨をものがたっている。

溝間操子

貪り読むタラワ島の記事ああ遂に四千五百の中に吾子も居りに
き

堀内雄平

屍を越えつつ落ちてゆきしなり遂にはひとりびとりになりて

米川 稔

蠟の燭の読みがたけれど人を恋ひ枕辺におくその手垢ぶみ

密林の長さ夜ごろをさめやすく鼠額を超え蜥蜴は脛を這ふ

青木種樹

補給なき南の島に兵吾れは手作り草鞋をはきて耐ゆなり

明日知らぬ命はおもはず貪りて食ふ水牛の強肉うまさ

十河義郎

すでに幾日食はずさまよふ密林に兵火知らざる木洩日させり

原 隆夫
補給すでにたのためず自活農園もはかどらざるに飢餓迫りたり
(昭和万葉集・卷上六)

アツツ島二五〇〇名、マキン・タラワ両島あわせて五四〇〇名の生命がむざんにも見すてられた。唯一の例外は、アツツ島の東、キスカ島の五六〇〇名が、偶然の濃霧にたすけられて救出された作戦であった。そのほかは文字どおりの全滅であった。ひとつには捕虜になることを極度に忌み、また厳禁されていたためでもあった。だからバンザイ斬り込み突撃が、日本軍最終の抵抗の型になったのである。

しかし、この年最大の事件は、十月の在学徴集延期臨時特例公布による世にいう「学徒出陣」であったといわねばならない。大学・高校・専門学校の学生・生徒の徴兵猶予が全面的に停止され、健康に異状のないものは全員陸海軍へ入隊しなければならなくなったのである。その当事者であった若い人たちは、この緊急な事態に、なにおもっていただろうか。「学徒出陣の歌」の特集がある。

大東文化学院 大坂 泰

あさあけに美の光と流れたる青雲のごとくすがすがしもよ

出で征かむわれの心を約むれば肅肅の語ありて唯につきなむ

上智大学 畔上知時

つれだちて門出づる時期せずして皆仰ぎたり母校の校舍
数ならぬこの身をすらも南海の島に果てしめむ時は来れり

国学院大学 河崎敏男

言挙げの秋には非ず学徒吾ら立たざらめやは大御軍に
萬邦に処得しむる神いくさ国学の子の任にあらずや

東京商大 白井洋三

式場に分列行進をおこすとさわき上る拍手に泪落ちむとす

漁業金融論現地調査を果さぬまま書きつがむ日を又思ふなし

東京商大 久我太郎

出で征くにとり佩かむ太刀をかたへに置き時を惜み書く「制度理
論考」

わがために盃挙げて師の君も友ども集ふ嬉しきかな今宵

東京商大 唐津常男

徴兵猶予停止せられて初めての学生兵たる榮に応へむ

遂げ得ざる論文を措きて卒業す悔とし言はばかかる悔のみ

成蹊高校 津島一弘

かくなると又かくあれと頼みたる学徒応召の火蓋切られつ

八年の軍事教練に物言はせよき兵たらんとおもへり我は

国学院大学 玉井清文

生死は語るべからず 大君のまけのまにまに今ぞいでゆく

手垢つきし愛しき本はわが名書きて征かざる友にわかち與へぬ

金沢医大 佐竹隆三

かたぢけなしと言ひしのちしまらく咽喉痛し胸衝く思友も語らず
萬歳とあはれはげしく手をふりて送りたまふ師も遠くなりたり

東京帝大 吉野昌夫

二十歳のこれの一生に悔いなくてわれほこらかに召されゆくなり
神宮競技場ここ聖域にして送らるる学徒幾萬に雨ふり注ぐ

いのちながらへて還るうつつは想はねど民法総則と言ふを求めぬ

〔「短歌研究」18年12月号〕

ここには当時の若い学徒たちのいたましい心の姿がちりばめられて
いる。たてまえを歌うのも本気なら、そうでない心の動きもまた
本音といわねばならぬ。親しい人との愛別離苦の情をしいてのりこ
えて、たてまえに生きねばならなかつた若い魂の苦悩、それを自分
に納得させる唯一のよりどころは、この愛する人びとのいのちを守
るために、わがいのちを犠牲にしても悔いがないということにあつた
ろうし、それがかれらの心底の本音であつたらうと体験的に推測で
きる。天皇のためでも、大日本帝国のためでもない、愛する身ちか
な両親、兄弟姉妹、恋人、友人、隣人を、この身をすてて敵の攻略
から守ろうというのが、この特集「学徒出陣の歌」に応募した学徒
たちの心の奥底からの願ひであつたのではないだろうか。その本音

とたてま^ええとにひきさかれる苦悩のうえに、かれら学徒には学問との別離という、さらに別の悲しみがあつた。卒業論文の未完成を唯一の悔いとする学生、入隊前夜とおぼしき一刻を惜しんで「制度理論考」を書きついでいる学生、生還を期していないといひながら「民法総則」を買わずにおれなかつた学生……真理をきわめたいと一心に歩んできた道だのに、それを国家の都合で強制的に中断せられる、歯ざしりしたいほどの無念さは、おそらく当事者がいには、実感としてうけとめがたいことかもしれない。

谷 鼎

わがたのむ思ひは深し^{かく}学な^がかばきよらかにたち^ゆ征かむ君らに一すぢの道定まりし若きらのわたくし^{こと}事もすがやかにいふ

山口茂吉

きはひ立ち征かむ学徒をいささかも心おきなく行けとゆかしむ

氏家 信

大君のみいくさ人ときほひたち吾子は征^こきたり学業を卒へて海軍に入隊したる長男の今宵居らねばさびしめり妻は

藤井春洋

若くして征かむ学徒のひとりく^くに、いたはれよ。身をと言ひたかりけり

航空隊に入ると昂奮^{キホヘ}る 若者の言^{コト}正しきは、涙ぐましも

（『短歌研究』18年11月号）

谷と山口の「きよらかに」「すがやかに」「心おきなく」という表現には、谷四十七歳、山口四十一歳という戦闘参加の危険性がほぼなくなつてきた年齢層ののんきさがみられる。いわば傍観者の美意識があるのだ。氏家のは肉親の情としてとうぜんの表現といわねばならないが、氏家信がそれをこえて「吾子」の衷情をどこまでおもいやれたらどうか。「学業を卒へて」という表現は、学徒動員の「猶豫停止」とちがつて「年限短縮」がその二年まえ、三カ月、その一年まえ、六カ月とつづいてきたなかで考えると、おそらく「学業を卒へて」は昭和十六・七年の短縮期の卒業生であつたのだから。が、それでも、三カ月、六カ月の短縮は、本人にとつて心のこりのおおい期間であつたはずだが、父親として「学業を卒へて」という表現になるのには、卒業証書を見た喜びがあつたのかもしれない。が、本人はどうであつたか、そこまでは親としておもんばかりはゆきとどいていないようだ。

すでに列挙した歌のなかに、その年十月二十一日の神宮外苑競技場における出陣学徒壮行大会を歌つたのもあるが、「壮行の辞」で、あ、多数の学徒が聴て一時に戦列に配せられて敵を撃つときの壮絶さを想ひ、たれか胸躍らざるものがありませうか、されば諸兄の心を心として、学問の研鑽を続けると共に、心身の練磨に努む

ることを誓ひます、どうぞ諸兄元気で征つて下さい、
といったのにたいして、「答辞」は、

生等今や見敵必殺の銃剣を掲げ、積年忍苦の精進研鑽を挙げて悉くこの光榮ある重任に捧げ、挺身以て頑敵を撃滅せん、生等もとより生還を期せず、在学学徒諸兄、亦遠からずして生等に続き出陣の上は、屍を乗越え乗越え、邁往敢闘、以て大東亞戦争を完遂し、上宸襟を安んじ奉り、皇国を富岳の泰きに置かざるべからず、
〔朝日新聞〕昭和18年10月21日夕刊。「壮行の辞」は慶大・奥井津二、「答辞」は東大・江橋慎四郎である。）
と決意を披瀝している。

野場鑛太郎

この日東京は烈しき雨降りて弟もその中にまじりゐて行く

広野三郎

出でて征く学生の宣誓をさきあつつ涙を垂れてゐる教授あり

峯村国一

答辞しばしとぎるるときに洩駁る声きこえてきて命にひびく

松村英一

若きらが面しづかにゆく見れば言葉かけたし一人一人に

岡山 巖

征きて再びかへり来めやも青春の美りの極み国にささげて

窪田空穂

学徒みな兵となりたり歩み入る広き校舎に立つ音あらず
いささかの残る学徒と老いし師と書に目を凝らし戦に触れず

木俣 修

ゆく思ひしづけくありて明日の日は捨てむ学帽を汝はかき撫づ

（昭和万葉集・巻六）

ここにはもはや送るものの虚脱感が色こくたよい、時代の巨大なうねりに、なすすべもなく茫然としている姿をみるばかりである。みずから戦場には立たずとも、いわゆる銃後の家族や近親のための不安や苦悩や悲哀もふかまつていった。

吉野鉦二

身は病めるこのわれすらを徴し給ふきびしき現思ひてひれ伏す

〔短歌研究〕18年10月号）

中島哀浪

一族の討死したる三人目の甥の忠男の名のよろしもよ

この畑を打ちし面影ありありとたふときろかも国護る神

（同前・18年11月号）

大鳥きよ子

夢に見る夫は軍服の人ならず背広に優しく笑まひてありき

山川京子

みんなの海のをさのまなかひにもとなかかりてよるひるもなし

川口汐子

君が機影ひとわが上にさしたれば息もつまりてたちつくしたり
眼路のかぎり生きの命のかぎりかつか立ちあふぐきみが機影を
君が機海と空とにまぎれ入りわれはうつけて砂の上にある

鳴村美智子

東雲の冷えに佇ちあて哨戒の夫が機影にまなこ凝らすも

石川まさ子

きみが手に成りし高菜は採り惜しみ五月の畑に花咲かせたり

亀田君子

征く日まで夫の握りし鎌の柄の手ずれ親しみわれは稲かる

平林英子

地に伏してただに祈らむ生還を母のころとくみ給へかし

武田与志

茶断ちして吾子の武運の長かれと百社詣に日は経りにけり

大島きよ子

陰膳にそへし口取のあえかさよ夫のうつしえ笑むがにおもほゆ

小泉茅三

紺碧の空と海とのただなかにうかべるかばねいくひただよふ

岩波香代子

戦死せる弟の日記に食べたき物観たきもの読みたきものありて泣かしむ

(昭和万葉集・巻六)

さまざまな人びとのさまざまな情念を織りこんで、この年もくれてゆく。

一九四四(昭和一九)年は、日本がいつそう苦境にたつ年となつた。

解題

「戦時下の文学」を通して、文学が文学でなくなり、人間が人間でなくなっていく「過誤の歴史」をきびしく追尋してこられた安永武人先生は、その対象を短歌や大衆文学に広げて考えていきたいと抱負を語っておられた。そのご研究成果が『戦時下の作家と作品』(一九八三年)の続編として刊行される日を多くの方々が鶴首しておられたことと思う。

掲載された遺稿は、先生の机上に他の資料とともに重ねて置かれていたものである。ご自身で作らせて常用しておいでになった緑色の罫線の二百字詰め原稿用紙一九二枚に鉛筆で書かれている。文章

には推敲のあとが著しく、行間・欄外に多くの書き込みがある。田中勳儀・小川直美両氏が本文校訂・整理に当たられた。

十五年戦争の始まった年から、敗色濃い中で一九四四（同十九）年を迎えるところまでが年を追って論じられており、敗戦までを書き続けるお心積もりだったと推察される。その意味では未完の論文であるが、この中に『昭和万葉集』『新万葉集』『短歌研究』誌などから合わせて三六一首を引用して論じておられ、その広がりと深まりの中に先生のご執筆意図をうかがうことが出来ると思う。

（内田 満）